



Tokyo Gakugei University Repository

東京学芸大学リポジトリ

<http://ir.u-gakugei.ac.jp/>

Title	チロル地域文化研究(I) : チロル史の断面
Author(s)	鷲山, 恭彦
Citation	東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学, 53: 111-118
Issue Date	2002-01
URL	http://hdl.handle.net/2309/14182
Publisher	東京学芸大学紀要出版委員会
Rights	

チロル地域文化研究 (I)

— チロル史の断面 —*

鷺山 恭彦

地域研究**

(2001年8月31日受理)

はじめに

チロルは、オーストリアの西部に位置し、南のチロルアルプスと北のドイツアルプスに挟まれた東西に横たわる広い谷の地域を指し、そこを貫流しているイン河に注ぐエッツタール、シュテューバイタール、ツィラータール、等々の多くの谷(=タール)によって構成されている。オーストリアに属する東チロル、イタリアに属する南チロルに対して、チロルの本体であるこの地域は、北チロルともよばれている。第一次大戦の結果分断されたが、しかし、本来は東西に走るチロル山脈の南側の南チロルと北側の北チロル、そして東端の東チロルは一体のものとしてあった。自然の環境に恵まれ、ハルやラッテンベルクのように岩塩の産出やガラス工芸によって栄えた町もあるが、主に農業と牧畜を中心にした村々によって構成され、東に500キロほど離れた首都ウィーンとは、歴史も文化も大きく異なり、チロル独特の山岳地帯の文化を形成している。

チロル山脈の分水嶺が現在イタリアとの国境となっており、南チロルと北チロルとは異なった国に分断されてしまっているが、この国境を越えて、毎年、羊の移牧が行なわれている⁽¹⁾。調査の対象としたのは、イタリア側のシュナールスタールの村々の羊が春になるとオーストリア側のエッツタールに移牧され、秋になるとイタリア側に帰っていく移牧の形態と農家経営である。

この移牧は、3599メートルのジミラーン山の西の鞍部であるジミラーン峠を越えて行なわれている。移牧

の日、3000メートルのアルプスを2000頭の羊が越えていく様は壮観そのものである。これはこの地域の人々が昔から行なっていて、数千年来続いていると考えられている。ここには国家による分断などはない。悠久の大自然の中で展開される移牧の壮大なこの光景を眺めていると、自然と戦いながら、移牧の知恵を生み出し、羊と共に営々と生きてきたチロル人の気概と生活と伝統の迫力に圧倒される。小賢しい国家利害による分断など卑小そのものに見える。

現在では羊で生計をたてるというよりも、この伝統を保持することに重点が移りつつあるようである。牧畜を主としたこの地の人々の農家経営の実態の調査を行ない、チロルの人々と具体的に接すると、この地域へのさまざまな関心がいやましにかきたてられてくる。移牧の調査を行なったイタリア側のシュナールスタールもオーストリア側のエッツタールも、それぞれ奥行が50キロにも及ぶ深い谷で、多くの村が点在している。チロルにはこうした大きな谷が幾つもあり、こうした谷によってチロルは構成されているといっても過言ではない。それぞれの谷、それぞれの村に特徴ある歴史が刻まれていて、これらの村を訪ねていくと、移牧に留まらない、自然と歴史、民俗と文化への様々な関心が触発され、それはチロル全体の関心へと駆り立てる。それはまた、新しくこの地を活性化させているスキーなどの山岳観光の在り方など、これからの地域形成への関心をも触発する⁽²⁾。

本研究は、まだ調査の途上にある移牧を主題としつつ、チロルの歴史的、民俗的、文化的な特徴をさまざまな側面から解明することを課題とする。まずは18世紀末、ゲーテの『イタリア紀行』に描かれたチロルを

* Tirol area studies (I)

** 東京学芸大学 (184-8501 小金井市貫井北町4-1-1)

見てみよう。

(一) ゲーテの『イタリア紀行』とチロル

「シャルニッツの近くからチロルに入る。その境界は、谷を閉ざし山々に連なる墨壁から成っている。岸壁は一方の側はどっしりかまえ、他方は垂直に聳え立ち、その姿は素晴らしい。ゼーフェルトからの道はますます興味深いものとなる」⁽³⁾。ゲーテはイタリアへの旅の途上、ドイツのバイエルンからオーストリアのチロルに入って行く様子をこのように記している。

ワイマールで宰相として政治的に多忙な10年間を過ごしたゲーテは、次第に宮廷世界の狭さ、官吏の世界の単調さと形式主義、停滞的な人々の在り方、シュタイン夫人との関係の行き詰まり、文学的・思想的停滞に懊悩し、この世界からの脱出を図ったのだった。1786年9月3日、チェコの温泉地カールスバートに滞在していたゲーテは、密かにイタリアに向けて出発する。37歳の誕生日を迎えた直後のことである。レーゲンスブルク、ミュンヘン、ミッテンヴァルトとひたすら南下し、9月8日、チロルに足を踏み入れる。この日ゲーテは、まずチロルの中心都市インスブルックへ、そして現在イタリアとの国境になっているブレンナー峠へと向かっている。

「ツィルルの近くで、イン河の谷へと下っていく。ここの地勢の美しさは筆紙につくしがたく、日盛りにも靄がかかって、実に素晴らしい景色である。御者は僕の希望より以上の速度を出した」。西から東に向かって流れるイン河にそって東西に広がるチロルの谷、この谷をドイツとイタリアを往還する道が南北に交錯する。そこに架かる橋を中心に発達したのが「イン河に懸かる橋」という源義をもつインスブルックである。

現在、鉄道でミュンヘンからインスブルックに行くには、そのまま南下する路線と東をまいて行く路線の二つがあるが、ゲーテのコースと重なる南下する路線に乗ると、ゲーテが「筆紙につくしがたい」と述べたそのままの見事な車窓が展開する。汽車はミッテンヴァルトから峨々とした山の間を走ったり、やがてゆっくり下り始める。すると右手に山が無くなって視界が開け、山腹を縫うように走る汽車の窓から、木の間越しに、大きな緑の谷が広がり、点々と村が見渡せる。チロルの谷である。この広々とした谷の真ん中を蛇行して流れているのがイン河で、その向こうには、雪をいただいたチロルアルプスの山々が見渡せる。イン河の谷、点在する村々、インスブルックの町を眼下に見ながら、汽車がゆっくりと下ってインスブルックに入っ

ていく風景は確かにゲーテの賛嘆したとおりである。

このコースを馬車で下ったゲーテは、しかし、インスブルックには宿泊していない。「インスブルックは、高い岩と山々の間にある広々とした豊かな谷間に、素晴らしい位置を占めている。初めはここに滞在しようかと思ったのだが、どうも落ち着いていられなかった」と記している。さながら逃亡者の如く、過去の一切と訣別せんとしてドイツを旅立ったゲーテは、切迫した内なる促しによって、一刻も早くイタリアの地を踏みたかったのだろうか。

インスブルックの町は、丁度、マリア生誕祭でにぎわい、人々の群れが通りを行き交っていた。「2時頃、僕の馬車が陽気でにぎやかな雑踏を分けて進んで行ったとき、すべての人々は楽しげに行列をつくって練り歩いていた」。現在のチロルの中心都市インスブルックは、20世紀に冬期オリンピックが2回開かれた国際的な町でもある。当時も南北交流の結節点で、ドイツの中央部のヴァイマールとは違った風物と町のたたずまいに、ゲーテが少なからず心惹かれている様子は筆致に見て取れるが、南国へとはやる心は、インスブルック滞りに傾かず、その日の内にブレンナー峠に向かうのである。

「インスブルックから登るにつれて風景はますます美しくなり、叙述するすべもない程だ。きわめて平坦な道を通って、水流をイン河へと送る渓谷を登っていくのだが、さまざまな変化に富んだ風景を見せてくれる。道が峨々とした岩山の近くを通り、そればかりか岩山の中へと切り込んでいったときでも、その向かい側はゆるやかな斜面をなし、この上なく立派な耕作を行なうことができるほどだ。いくつかの村落や、大小の家屋や小舎が、どれも白く塗られて、傾斜する広い高原の畑や生け垣の中に混在している。まもなくあたりは一変して狭くなり、利用できる場所は牧場となり、ついにそれも急斜面となって終わっている」と峠までの道程を語っている。こうして9月8日の夕方にはブレンナー峠に到着し、そこに宿泊した。

変化に富んだ渓谷、急斜面の牧草地、白壁の美しさの特徴とするチロルの村々が、ここには的確に描写され、ヴァイマールの生活で消耗し枯渇した心がチロルの風物に接して一気によみがえり、旅にはずむ心のリズムと一致して、「眼の人」ゲーテの本領が生き生きと発揮されているような叙述である。

翌日の9月9日朝は、ブレンナー峠で駅舎などのスケッチをして過すのだが、宿の主人が、今晚は月明かりだし、道もよい、明朝の刈り草運びにと返して馬を使いたいので、今から出発するのはどうかと提案

してくる。ゲーテは身勝手な言い分と思ったものの「僕の内心の衝動とも合致した」ので、荷造りをし、ブレンナー峠を何と夕方7時には出発している。夜中に馬車を乗り継ぐ強行軍の南下である。

そして馬車は「高くそびえ立つ岩山の間をエッチェ河の急流に沿ってすごい速度で駆け下った」。月が昇り、峨峨たる山々や溪谷の水しぶきや水車など、月の光に照らされたダイナミックな南チロルの夜景をゲーテは堪能。21時にシュテルツィング、零時にミッテルヴァルト、そしてブリクセン、夜明けにはユルマンに到着。「どの御者も目が眩み耳がつんぼになるほど走らせた」と記しているように、峠をひたすら南に下っていった。トイチェンに朝の7時、そこからポーツェンに向かう途上で「気持ちのよいそよ風がこのあたり一面に吹いていた」と記す。今までにない新しい風、南国の風をゲーテは実感。そして南チロルの中心都市ポーツェンに「明るい日差しを受けながら着いた」と記している。

「ポーツェンの歳市では絹物の売れ行きがよく、毛織物や山地から集めてきた皮革類も市に出される。しかし主として集金をしたり、注文を取ったり、新たに掛け売りをするためにやってくる商人も幾人かはいらる。ここに一度にまとめて見られる産物はすべて調べてみたいという気は大いにあるのだが、つねに背後からせき立てられているようで安閑としておれず、すぐまた急ぎ出発する」とある。こうしてブレンナー峠から24時間の馬車の旅をこなして、9月10日の夜8時にトレントに到着して宿泊している。

翌日の9月11日の夕の記述は「いまぼくはこのロヴェレートにいる。国語の境目にあたり、ここまで下りてくる道中では、ドイツ語とイタリア語の間をまだ揺れている。いま初めて御者も生粋のイタリア人になり、宿の主人もドイツ語を話さない。ぼくはいま自分の語学力を試さなくてはならぬ。これからは僕の好きな国語が生きてきて、日常語になると思うと、なんともううれしいことだ」。いよいよ憧れの地イタリアに足を踏み入れたのである。

ゲーテは、ヴェローナには真っすぐ行かず、ロヴェレートからガルダ湖に回っている。ガルダ湖の北辺の町トルポーレはまだオーストリア領である。そこから船で南下して湖上からガルダ湖の風光明媚を味わう。途中で寄ったマルチェージネでは、古城に立ち寄って古い塔をスケッチしていると、ヴェネチア領とオーストリア領の国境の要塞を調べにきたオーストリア皇帝の配下の者ではないかと嫌疑を懸けられる。「とんでもない。皇帝の一味などとは。僕はあなた方同様に共

和国の市民です」とゲーテは、故郷のフランクフルトを引き合いに出し、そこに根をもっている市民であることを強調している。パルドリーノまで船に乗り、そこからはらばに乗って、いよいよローマ時代以来の円形劇場で有名なヴェローナの町に心踊らせつつ入っていくのである。

ブレンナー峠越えを中心とした『イタリア紀行』のこの冒頭の部分には、「胸中でほとんど古すぎるものになってしまった宿望を果たすため」にやっと実現した旅立ちの高揚した気分と旅に触発された新鮮な認識欲とが躍動しており、「現在のぼくには、書物も絵画も与えてくれない、なまのまの印象が大切なのだ」と語って、新しい見聞や発見によって、自分自身を豊かに再生していこうとする意欲に満ち溢れている。たしかにこのイタリアへの旅が文豪ゲーテの大きな転換点となった。戯曲『イフィゲーニエ』はまだ構想の段階にあり、草案を「同伴者として美しい南の国へと連れていく」と語っている。後にドイツ古典文学の極北といわれるこの作品が、イタリアの自由で明るい光のもとで初めて新しい結実に向かうであろうことが既に予感されている。身も心も解放されて、旅での行動と思索が「ここ数日来ぼくの精神にまったく別な弾力性を与えてくれる」と新しい精神の覚醒を語るのである。

チロルは、それゆえゲーテの『イタリア紀行』においては、最初の通過地点でしかなかったろう。シャルニッツからインスブルクを経てブレンナー峠を越えるコースが、ドイツとイタリアを結ぶ最短距離であることからわかるように、ゲーテはひたすらイタリアに向かった。しかし今まで見てきたように、「眼の人」ゲーテの観察は、さまざまにチロルをも語っていて興味深い。

第一にそこに生きる人々の様子が生き生きと綴られている。ゲーテはチロルの人々を「正直で率直そのもの」であり、「容貌はかなり似かよっていて、女たちは鳶色のパッチリした眼と、くっきりと黒く引かれた眉、これに対して男たちはブロンドの幅広い眉を持つ」と描写する。山間に定着して牧畜と農業にいそむチロルの典型的な人々の姿である。チロリアンハットとして知られる特徴ある「緑色の帽子」にも注目し、「灰色の岩のあいだを行く男たちの緑色の帽子は、見てもたのしい。帽子にはリボンか、房のついた琥珀織りの飾り帯がピンで実に優雅に止めてある。また、誰もが花か鳥の羽根を帽子につけている」と語り口も絵画的だ。女たちも「他国へ行くときはみな、緑色の男の帽子をかぶる」という。色のついた羽根が大変尊

ばれ、山地を旅行する人は、これを持参すると酒手の代わりになって喜ばれると、庶民の間で美しい羽根が珍重されていることも述べられている。

しかし、ブレンナー峠を越えて南チロルに入ると、まったく違った印象を語る。「人間の容姿がすっかり変わっているのに気付いた。特に女性の褐色をおびた青白い顔色は気に入らなかった。その容貌は生活の窮乏を物語っていたし、子供たちも同じようにみじめな顔つきをしていたが、男たちはいくぶんましで、ともかく骨格はまったく正常で申し分なかった」。ゲーテはその原因として、ブレンデと呼ばれるとうもろこしやそばの常食を北チロルではバターで炒めるのに、南チロルではそのまま食べていることによる栄養不良ではないかと考えるのだ。そして「いったい金持ちの百姓はいないのか、彼らのご馳走をふるまうことはないのか」と尋ねる。ふるまいの文化による社会的格差は正の幾分かバランス機能を念頭においてのことだが、宿の娘にしたこの質問によって「いちばん裕福そうに見えるぶどう栽培者が実はいちばん困っている」実態を知るのである。彼らは都会の商人の手の内にあり、凶作の年には金を借りざるをえず、豊作の年にはぶどう酒を安く買い叩かれているというのだ。ゲーテの慧眼は、栄養不良の原因が単に調理法にとどまるのではなく、都市による農村の搾取によって生まれる貧困と関連していることまでも見抜いている。

これに対して都市に住む人々の表情は、インスブルックの町では「健康で裕福そうな人々が群れをなし」と形容し、ポーツェンでは「たくさんの商人が集まっていて、その顔つきが面白かった。目的を持った快適な生活が、実に生き生きと外に現われている」と語っている。自給自足的な北チロルの人々、商品経済に浸透された南チロルの人々、そして都市に住む闊達とした市民たちの三様の姿をゲーテは描き切って、それを今日に伝えているといえよう。現実のそれぞれの姿を、そうと自覚せずに、しかし総体として眺めるゲーテの眼差しは流石だ。

第二番目に、自然界へ考察も興味深い。イタリアの地でゲーテは、「原植物の理念」と「万物の変態の観念」を確信するようになったといわれるが、チロル地域の4日余りの通過旅行の間にも、自然界に対するコメントは豊富で、「北緯51度で受けた気候の厳しさからの逃走」も48度まで南下してきたのに、予想を裏切られてしまった、と書き、まず気候に深い関心を示す。「気候や天候をつくるのは、ただ緯度だけではなく、山脈、特に東西に国土を横断するあの山脈である」とここでの体験を確認し、「平地ではよい天候も悪天候

もそれがすでに出来上がってしまってから受け取る」が「山地では天候の生成していく現場に居合わせる事ができる」として、チロルの山中で、天候の生成するダイナミズムを考察している。天候は確かに大気の動きや変化によっている。しかしそれは「山の内部の静かな秘密の動き」と連動しているという自説を披瀝する。大気の動きは、この波打ちながら働く「引力」の増大と減少によるのであり、こうして雨、霧、雲、夕立の成立を考えるのである。そして山頂の夕焼けを眺めながら「雲塊は徐々に消散し、ぼくの目の前で、糸巻き棒のように、ある眼に見えぬ手によって完全に紡ぎつくされてしまった」と結ぶ。ここでいう引力とは、現代の知識で言えば気圧を想定した言葉であろう。ゲーテの科学的精神と解明力は高度である。

第三番目にゲーテは「気候、山の高さ、湿度などによって、極めて多様な規定を受ける植物界」に関心を示し、チロルの植物の生態について語っている。観察をしていくと、低地では枝や茎が強く太く、芽と芽のあいだが接近し、葉も広がったのに、山地に登るにつれて枝や茎は細くなり、芽と芽のあいだは離れ、節と節の間隔が大きくなり、葉の形が槍のように尖ってきて、これを柳やりんどうやとうしん草で確認し、この変容が植物の種類の間隔からくるものではなく、状況に規定されて生まれたところに、造化の妙を見ているのだ。垂直分布帯の概念は既に当時知られていたというが、同一植物が高度によって形を変化させていくという生態は、20世紀に入って科学的に確認されたことで、ゲーテがこのことを初めて指摘したのだという⁽⁴⁾。リンネの本を携えてきたが、分類は得意ではないとも語り、ゲーテの眼差しはむしろこのように植物の全体的な様態に向かっている。

作物については、インスブルック近郊の畑には、とうもろこしやソバが栽培されていると書かれ、「林檎と梨はすでにインスブルックに来るまでの谷間でもよく見かけるが、桃やぶどうはイタリアか、あるいはむしろ南チロルから運ばれてくる」と語って、インスブルック周辺の穀類や果樹の栽培の様子を浮かび上がらせている。しかし、ブレンナー峠を越えてエツェ河沿いに南下すると様相は一変する。「河岸近くの土地には丘の上までも、息がつまると思うほどぎっしりと木々が植えてある」。ぎっしり植えても豊かに成長する程に地味にも気候にも恵まれているのである。そこには、ぶどう、とうもろこし、桑、林檎、梨、まるめる、くるみと豊富で、きずたが岩をつたい、にわとこが威勢よく枝を突き出している。北チロルと南チロルの対比は、とりわけ栽培作物に最も明瞭に現われてい

る。

こんにちでも、インスブルックからブレンナー峠を越えて、南チロルにはいると、とくに冬季には南チロルの眩いばかりの陽光に驚かされる。インスブルック周辺の植生の単調さや作物の少なさにくらべれば、ブレンナー峠の南は別世界の感を深くする。栽培作物の違いは、アルプスの北の地域からイタリアをめざした旅人は、ゲートでなくとも、「檸檬の花咲く」イタリアへきたことを実感したに違いない。

ブレンナー峠の南は、いわゆる地中海気候である。

地中海気候の特色は、夏季の乾燥であり、このため夏の乾燥に耐えうる多年性作物であるブドウやオレンジなどの樹木栽培がみられる。ブドウは地中海地域の土着の作物であるらしい。

ゲートの通過したエツェ河沿いの斜面には、古来からブドウ栽培が盛んである。ブドウは、どのような地形や土壌でも栽培できる。ほかのどんな作物も、灌漑なしでは成育できない不毛の岩石地帯でも収穫がある。こんにちでは、灌漑施設があるので、リンゴの栽培もブドウにおとらず盛んである。

トウモロコシもゲートの目には、新鮮であったにちがない。トウモロコシはアメリカ原産で、コロンブス以降にヨーロッパに持ち込まれ、家畜の飼料として広まったものである。トウモロコシは、当初は地中海地域にも、またいわゆる西岸海洋性気候にも合わなかった。つまり地中海気候は夏季の乾燥がその成育を阻害した。また西岸海洋性気候のもとではその冷涼な夏と曇りがちな気候が、トウモロコシには合わなかった。トウモロコシは、その成育に暑い夏が必要で、ゲートの時代のヨーロッパでは、バルカン、北部イベリア、イタリアのポー河流域、フランス南部などが主産地であったものと推測される。今日、アルプスから北側のヨーロッパを旅行すれば、あちこちでトウモロコシの栽培をみかけるが、その地域は夏の気温がかなり高くなるところと考えてよい。

ところで、前述のようにゲートは、ブレンナー峠を越えて、南チロルに入ると、人びとの容貌が生活の窮乏を物語っていると書いている。これにはトウモロコシが関係していると考えられる。

アメリカからヨーロッパに持ち込まれたトウモロコシは、一般には飼料作物であったが、この南チロルとルーマニアだけでは、食糧として受け入れられた。

トウモロコシは、すでに紀元前5000年以前から、ネイティブ・アメリカンには知られていたが、食料になったのは紀元前2000年くらいになってからである。つまり「ニシュタマリゼーション」という処理法が発見

されてからのことである。発見したのは、メキシコ先住民のオルメカ人と言われる。その調理法は、トウモロコシを石灰や木炭で煮てから、一晩おいておくと軟らかくなる。これによって、人間が食べる場合のトウモロコシの栄養価が著しく高まる。それを次の日に果皮を洗い流し、すりつぶして練り粉状にして（これをアステカ族の言語でニシュタマリという）、食用とした。

トウモロコシをヨーロッパに持ち込んだ人びとは、このニシュタマリゼーションまでは紹介しなかった。ヨーロッパには、強力な製粉機があったからである。ニシュタマリゼーションをしないということは、その処理によってトウモロコシに含まれるタンパク質に対して、灰のアルカリの作用によるアミノ酸を増加させるという特性を放棄することを意味する。その結果、トウモロコシを食用とした南チロルの人びとは、ニコチン酸アミド欠乏症候群として知られるペラグラをはじめとするいくつかの疾患に悩まされることになった。この病気は、のちにヨーロッパからアメリカに移住し、トウモロコシを栽培した人びとの間にも出現したといわれる。

ゲートの観察は鋭かった。

しかし、ブレンナー峠の北には酪農が普遍的にあり、その南に来たら酪農がみられなかったはずであるが、ゲートがこのことに触れていないのは興味深い。

第四番目はチロルの山々の地質学上の観察である。「これまで横断してきた石灰アルプスは、灰色で美しく異様な不規則の形をなしている。もっとも岩は石灰の岩床と岩層とに分かれてはいるのだが。岩床は弓形をなし、岩の風化作用も一様ではないので、岩壁や山頂は奇観を呈している。このような山の性質はブレンナー峠のずっと上の方まで続いている」。インスブルックの美しさはその背景の白い山脈である。「多量の石英を織り込んだ暗緑色と暗灰色の雲母片岩に、白色で目のつんだ石灰岩が寄りかかっていたが、それは継目のところに雲母を含み、無数の裂目がありながら大きな塊となって露出していた」と更に詳しく岩の組成を観察した結果を記している。そして「山から発する河の水はただこの雲母片岩と灰色の石灰岩だけを運んでいくだけである」。この地質上の特徴はチロルの谷全体に当てはまり、それゆえ、この地方の谷川の水は清流ではなく白くにごり、それを集めているのがイン河の青白色である。

一般にアルプス地域の河の水は、少し青みのかかったミルク色であることが多い。この青みがかかった流れの上流には、氷河のあるたおやかな山岳の存在を示

している。氷河は地域によってその流れの速さは異なるが、氷河が移動するとき、硬い岩を削り取ってゆく。氷河の底には大小の岩屑が凍り付いているので、氷河が動くとその岩屑も動いて、下の岩盤にあたる。そこで細かな岩の粒子ができる。それが水に溶け込んでながれるのである。アルプス地域の人びとは「氷河のミルク」と呼ぶ所以である。

インスブルック（標高574m）は東西にはしる谷を流れるイン河に沿う街である。この古い街の北側は地元の人びとはノルドケッテと呼ぶが、正式にはカールヴェンデル山脈という。カールとは氷河が削り取ったお椀を半分にしたような、丸い谷のことである。ゲエテはイン河の橋を渡り、カールヴェンデル山脈を眺めた。

カールヴェンデル山脈は、ゲエテも書いているように石灰岩でできている。この石灰岩は浅い海底にたまったものが、隆起や褶曲をくり返しながら山脈になった。それが氷河の作用をうけたものである。インスブルックの北側に屏風のようにそそり立つ2,500mをこえるその切り立った大きな山容は、遠目にも白く、堂々としており、たおやかに見える。

インスブルックから南チロールへぬける道は、ゲエテの時代にも深い氷河の谷をさけて、最終氷期以降にできた河岸段丘の上を通り、最後にブレンナー峠(1,375m)を越える。この道は古くは紀元前にローマの植民者たちが南から北に越えた道でもある。現在、ここにはオイローバ・ブリュッケ（ヨーロッパ橋）という、ヨーロッパの自動車道路ではもっとも高い橋があり、あっという間にブレンナー峠に達してしまう。

われわれは、ヨーロッパアルプスを想像するとき、氷河の作用を幾度となくうけたその急峻な山容から、アルプスが地中海地域とアルプスの北にあるこんにちのドイツなどの地域の交流を阻んでいたものと考えがちである。しかしアルプスは徒歩交通の時代には、結構通りやすいものだった。アルプスには西から、モン・スニ峠(2,084m)、グラン・サン・ベルナル峠(2,470m)、シンプロン(2,005m)、ザンクト・ゴッタルド峠(2,100m)、そしてブレンナー峠(1,375m)などアルプスを縦断する峠が数多く存在した。なかでもブレンナー峠は、標高が低く東アルプスを縦断する交通路のなかでは有史以前から利用された。このようにアルプスは、見かけとは異なり、アルプスを挟んだ南と北の地域にとって、障壁の役割を演じたことはなかった。通過しやすい峠があり、侵入者は容易に越えられた。ゲルマン民族も、カルタゴのハンニバル將軍もアルプスを越えて、ローマ社会に攻め込んだのである。

だからこそアルプスの南に住んだイタリア人は、アルプスを「偉大な裏切り者」とよんだのだ。

ブレンナー峠を越えた南チロールでは、雲母片岩の上に乗った大理石坑や斑岩の見事さを語って、石灰のことは記されていない。山の組成が違っているのだろう。

最後にチロール地方の言語についての観察をみてみよう。ゲエテは、ロヴェレートに入るとイタリア語が中心に話されていると述べている。古来からのドイツ語とイタリア語の境界地域は、この辺にあったのだろうか。ほぼ同緯度のガルダ湖の北端のトルポーレでは宿の主人はドイツ語を「イタリア式のアクセント」で話しているとある。この辺が南チロールとヴェネチアの境界で、そこがドイツ語とイタリア語の境目となっているのなら、当時の国の区切りは極めて自然なものだったと言えようか。現在はブレンナー峠以南はイタリアに属し、南チロールはイタリアでありながらドイツ語を話す人々によって構成されている。南チロールは政治的利害によってチロールから分断された。言語が交錯している地域のこのゲエテの報告を読むと、後世の政治的線引の不自然さと強引さが一段と際立って見えるようだ。

以上、ゲエテの『イタリア紀行』でチロールがどのように描かれているかを見てきた。たった4日間の記録であるが、ここにはチロールの人々の生活とそれを取り巻く自然が鋭い観察力によって広く考察されている。それは当時の貴重なドキュメントであり、絵画的に浮かび上がってくる描写によって、同時に連れ戻す力をもっている。と同時に、とくまらず数値とデータ、事前の情報が頭にあって、意識するしないにせよ、その視角から分析的に見てしまうわれわれと相違して、初めて出会う世界の全体を、総体的に観察しつつ、分析と総合を繰り返していく実相観入のゲエテの態度からは、多くの示唆を読み取ることができよう。

(二) オーストリアのチロールとイタリアのチロール

次にチロール地方の歴史について概観しておきたい。現在オーストリアのインスブルック中央駅の駅前広場は「南チロール広場」と名付けられている。第一次世界大戦の戦後処理の結果、「南チロール」は現在イタリアに所属している。しかし、ゲエテの記述から判るように、ブレンナー峠の南側に広がる南チロールはドイツ語を話す地域であり、それまではオーストリアのハプスブルグ帝国に属していた。チロールの人々は、南チロールとは一体だということをお強調するために、北チロールのインスブルック駅前の広場をこう名付けてい

るのだろう。オーストリアの大学で学ぶ南チロル出身の学生に対しては、オーストリア政府から奨学金が出ている。

丁度10年前の1991年9月19日、チロルの谷のなかの一つ、エッツタールの奥のジミラーン峠近くの標高3279メートルのハウスラブヨッホの氷河の中で、頭部と肩が氷から突き出ているミイラ化した遺体が発見された。年代測定によっておよそ今から5000年前の新石器時代後期のものと判明する。「エッツ渓谷の雪男」を意味する「エッツターラー・イエティ」を縮めて「エッティ」と呼ばれる新石器時代人である。このようにチロルの歴史は、当時のカーム文化、ホルゲン文化、レメデッロ文化、等々との関連で語られる程に古いのだが、ここでは南チロルと北チロルに焦点を当てて中世以降の歴史を概観しておこう。

封建諸侯が台頭してその支配地域を争った13世紀から14世紀にかけてのチロルは、ゲルツ家、ハプスブルク家、ヴッテルスバッハ家などの争奪の地となっていた。そしてやがて1363年にハプスブルク家の支配地域となって、ハプスブルグ帝国に組み込まれた。チロルの中心は最初は南部にあり、首府は1420年までメラーンに置かれ、それ以後にインスブルックに移る。

チロルの人々が本格的に歴史に登場するのは、18世紀末に侵攻してきたフランス軍との戦いにおいてである。そして1797年、「シュピングスの戦い」でチロル農民軍はフランス軍に勝利した。ここには、彼らの愛郷心と独立不羈のたじろがぬ犠牲的精神がいかに発揮されている。

1805年、アウステルリッツの「三帝会戦」でナポレオンに破れたオーストリアは、チロルをナポレオンに味方したバイエルンに譲渡しなければならなくなった。しかし1809年、南チロル出身のアンドレアス・ホーファーに率いられたチロルの人々は、バイエルンとナポレオンに抵抗し、チロルの自由と統一を求めて蜂起する。パッサイア渓谷の旅籠「ツーム・サンド」の主人だったというホーファーは、イン渓谷のヨーゼフ・シュベックバッハや、クラウゼンのカプチン派神父ヨアヒム・ハスピンガーらと蜂起の指導部を構成した。チロル蜂起軍は、バイエルン軍とフランス軍に対してよく戦い、市民統治の自治体宣言を行なうまでに至ったが、戦局は逆転に逆転を重ね、「ベルクイーゼルの戦い」でのチロル軍の敗北によって、帰趨が決定づけられる。

「フランスは降伏の際の恩赦を約束する声明を出したが、互いに矛盾し合う情報の交錯する中、混乱したホーファーはしばらく抵抗を続け、局地的成果を上げ

ていた。結局彼は逃亡せざるを得なかった。その隠れ家、パッサイア渓谷のフンドラーアルムで、没落農民フランツ・ラッフルに密告された。ホーファーは捕らえられ、マントゥアの偽装裁判で、ナポレオンの意向通り、死刑の判決を受け、1810年2月20日に城塞塁の前で銃殺に処された。同志で旅籠「アン・デア・マール」の主人ベーター・マイルは、逃亡工作をすべて断り、同日、ボルツァノで同じ運命を辿った。この二人の南チロル人は、1796、97年、1809年の戦いで倒れたブレンナー峠両側の約2500人の同郷人と共に、チロルの自由と統一の殉教者になった⁽⁵⁾。ナポレオンは、チロルの抵抗力をそぐために、1805年にバイエルンに一括割譲されたチロルを、今度は分割した。南部をイタリア王国に、南部のメラーンやブリクセンを含めた北側をバイエルンに残した。この200年前のチロルの農民の戦いを、チロルの人々は今日なお大きな誇りをもって語っている。やがてナポレオンの没落とウィーン会議によって、チロルは再びハプスブルク帝国の版図になる。

文化的にも言語の上でも一体的であったチロルが、オーストリアとイタリアに分割されて、今日の「南チロル問題」が起こったのは、実は第一次世界大戦によるものである。ドイツ・オーストリアに対して「好意的な中立」を守っていたイタリアは、セルビア問題を契機にイギリス・フランス・ロシア側に立ち、1915年5月23日、ドイツ・オーストリアに宣戦布告。その見返りは、南チロルやトリエステなどオーストリアの領土の割譲であった。これによって戦争の早期決着が期待された。

しかし、イタリアの参戦は、チロル、ケルンテン、スロヴェニア等に強烈な抗戦意識を生みだし、対イタリア戦に備えて各地に郷土防衛軍が生まれる。イタリア軍の攻撃は、イゾンツォの戦線において双方に大きな犠牲を強いるのみで、イタリア側が戦果をあげることにはなかった。大戦は早期決着どころか、その後3年続いた。「イゾンツォの戦い」は12次におよんでいる。

1916年のオーストリア皇帝フランツ・ヨーゼフ一世の逝去、1917年のドイツによる無制限Uボート作戦、それに対抗したアメリカの参戦、ロシアにおける3月革命や10月革命と様々な政治的ベクトルが交錯しつつ戦争は展開し、1918年のブレスト・リトフスク講和条約によるロシアの戦線離脱は、ドイツ側に有利に働くものの、イギリス軍のドイツ西部戦線への参画、フランス軍のテッサロニキ部隊によるブルガリア戦線の勝利によって、まずブルガリアが、ついでトルコが脱落し、ヨーロッパを巻き込んだこの第一次大戦は、1918

年、ドイツ、オーストリア側の敗北で終わった。

勝利したイギリス・フランス・イタリア側は、既に1915年の「ロンドン協定」で南チロルをイタリア王国に割譲することを決めていた。

そして1919年のサンジェルマン条約によって、南チロル割譲が決定する。住民のほとんどがドイツ系であったこの地域に対してはイタリア化の方策が取られ、とりわけ1922年に政権を取ったムッソリーニは、住民の名前をペーターはピエトロに、ヨハンはジョバンニにという具合にイタリア風に変更させ、ドイツ語の使用を禁止し、チロルの伝統文化を否定するなど、ポーツェンにおける彼の執行者であるエットーレ・トロメスを通じて、南チロルの徹底的イタリア化をはかったのである。

第二次世界大戦後は、南チロル民族党の活動や、新聞や雑誌の発行によつて、チロルの民族的・伝統的アイデンティティーが強く自覚され、主張されはじめた。ドイツ系住民は言語上と文化上の同等の権利をみとめることを要求し、これは自治権獲得、分離独立運動にまで発展していった。ジルヴィウス・マグナーゴの尽力によって生まれ、1972年に発効した「南チロル包括協定」は、南チロルでドイツ語とイタリア語を公用語として指定し、学校においてドイツ語の授業が正式に認め、雇用機会の平等も保障した。ドイツ系住民のこうした独自性の保障は、さまざまな権利をイタリア人と対等に認めることで、かえってイタリア社会への帰属を自然なものとした。その結果「かつて言語によって区別されてきた高齢者層とは対照的に、弱齢者層においては帰属集団選択の動機は次第に薄れつつある。そこで、このことが南チロルという民族混合地域に新しいアイデンティティー、つまり“私はドイツ系でもイタリア系でもない、南チロル人だ”という意識を生み出し、ひいてはこれが地域イニシアチブの高揚につながるという期待も生まれつつある」⁽⁶⁾という。ドイ

ツ系70%、イタリア系30%。つまり南チロルの二つの言語集団のアイデンティティーは、民族帰属意識から地域帰属意識へと移行し、それと平行して民族集団は、文化集団としてよりも、コミュニティや職業を通じた社会集団という意味合いとして継続しているというのが今日の状況である。ECによってこうした方向は一層定着していくと考えられる。

註

- (1) Karl-Heinz Rochlitz Schnalstal S.49
Tapeiner Verlag
- (2) 池永正人 「オーストリアアルプスにおける山岳観光の発展と山地農民の対応 — チロル州フィス村を事例として —」
人文地理 第51巻 第6号 p62~79 1999年
同 「オーストリアアルプス・レンゲンフェルト村における山岳観光の発展と山地農民の対応」
新地理48-1 p17~35 2000年
- (3) Goethes Werke Hamburger Ausgabe
Band 11 S.15~28
Christian Wagner Verlag
『ゲーテ全集』 第11巻 p12~31 潮出版社 1979年
- (4) 小泉武栄 「ゲーテの自然地理学」
東京学芸大学紀要 第3部門 社会科学
第37集 p.49 1985年12月
- (5) Erich Zöllner Geschichte Österreichs S.341
Verlag für Geschichte und Politik Wien 1990
エーリッヒ・ツェルナー 『オーストリア史』
p.425 彩流社 2000年
- (6) 加賀美雅弘 「中央ヨーロッパにおける民族集団の諸相」
東京学芸大学紀要
第3部門 社会科学 第51集 p.63 1999年8月